

トクさんのやさしい畑

大石 真・作 みうらひでかつ・絵



913

大石 真

トクさんのやさい畑

講談社 1979

93p 22cm (講談社の新創作童話 9)

おいし まこと

トクさんのやさい畑

定価650円

昭和54年9月20日 第1刷発行

作 者 おいし まこと 大石 真

画 家 みうらひでかつ

装 丁 広瀬 郁

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京(03)945-1111 (大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 堅省堂

© 大石 真・みうらひでかつ

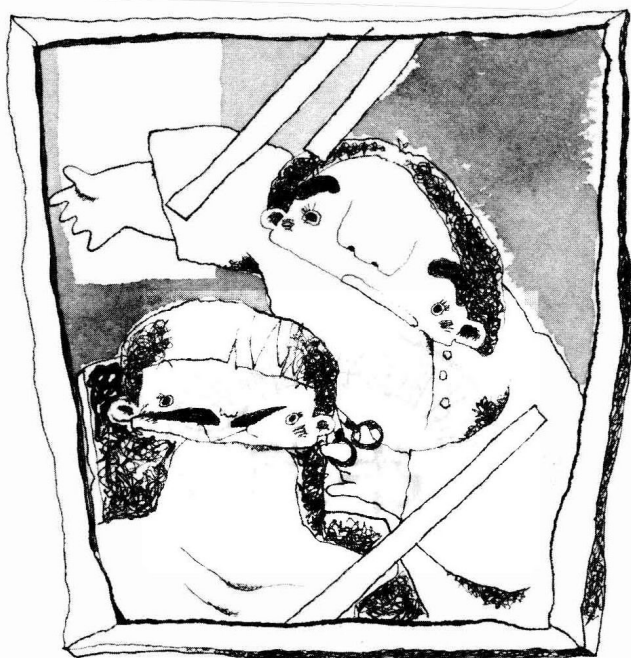
1979 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。(児一)

8093-442594-2253 (0)

トクさんのやさい畑

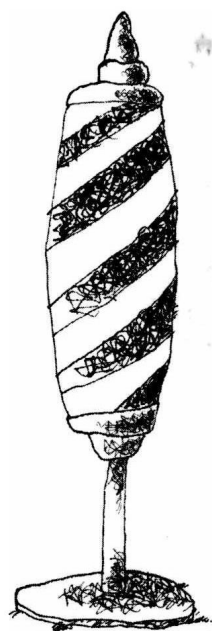
大石 真・作 みうらひでかつ・絵

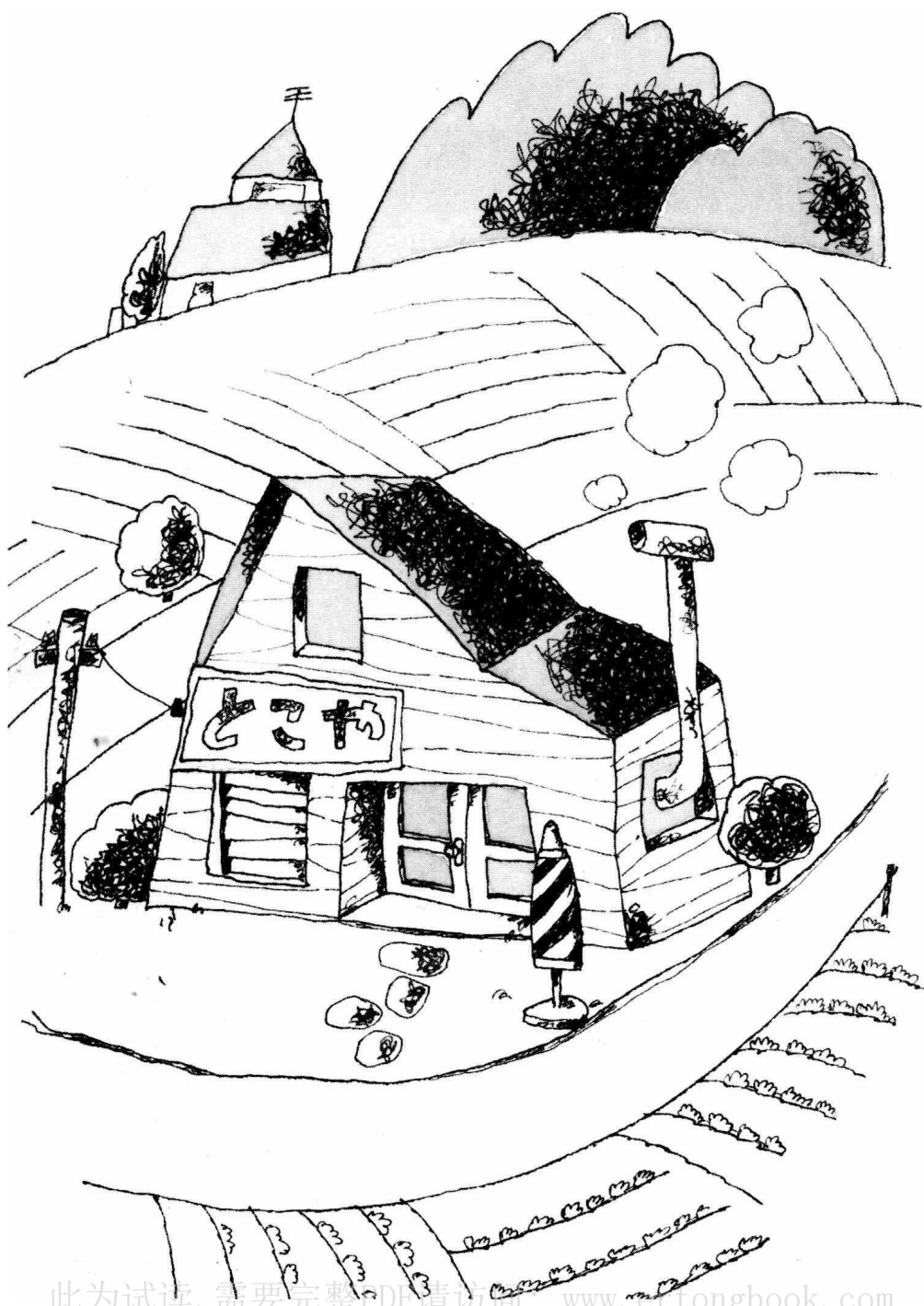


そこは、にぎやかな町まちの中心地ちゅうしんちから、すこしばかりはなれていました。

家がぼちぼちたっていて、まだ、畑はたけや森もりなんかものこっていました。

そんなところに、一けん、どこやさんが店みせをひらきました。





こんなさびしいところに、とこやさんが店をひらいたりして、いったい、お客さんがきてくれるものでしょうか？

だれだつて、そう考えるにちがいありません。

とこやさんのおかあさんは、しんぱいして、

「トク（これはとこやさんの名まえです。ほんとうは、トクゾウというのですけどね。）や、こんなところに、お客さんがきてくれるもんかね。」

と、なんども、きいたほででした。

そのたびに、トクさんは、

「なあに、だいじょうぶでしょうよ。」

と、のんきそうにこたえました。

でも、やっぱり、おかあさんのしんぱいしたとおりになりました。

お店をひらいてから、一日たち、二日たちしても、お客さんは、ひとりもやってきませんでした。

三日たち、四日たちしても、さっぱり、お客さんはやってきませんでした。

トクさんのおかあさんは、しんぱいでたまらなくなり、また、トクさんにいいました。

「こんなことだと、お客がひとりもこないうちに、お店をし

めなくちやならない、なんてことになるんじゃないかね。」

でも、トクさんは、へいきな顔かおをして、

「いや、そのうち、なんとかなるでしょうよ。」

と、わらいながらいいました。

そして、トクさんは、そのあいだどうしていたかというと、

お店みせのうらにかりた、小さな畑ちい はたけを、せっせとたがやしていました。

トクさんは、うでのいいとこやさんでしたが、畑はたけしごとも大だいすきだったのです。

さて、五日いつめのことです。



ひとりの男の子が、トクさんのお店に、おずおずとはいってきました。

たぶん、きんじよの子どもで、ひやかしはんぶんによつてきたのでしょう。

「おや、まあ、いらつしやい。」

お店のばんをしていたトクさんのおかあさんは、うれしそ
うに、この小さなお客さんをむかえました。

それから、うらにまわつて、

「トクや、トクや、お客さまだよ。」

と、畑しごとをしているトクさんをよびました。



トクさんは、すぐに^{はたけ}畑しごとをやめて、

「やあ、おまちどおさま。」

と、お^{みせ}店に^{かお}顔をだしました。

それから、か^{まえ}みの前で、

男^{おとこ}の子^このか^{かお}みを^かったり、^{かお}顔を

を^かったりしたので、そ

のあい^{おとこ}だじゅう、男^この子は、

くすくす^{おお}わたり、^{こえ}大声で

わたり、それはまあ、た

いへんなさわぎになりました。

どうしてかって？

それは、かみの手入れをしながら話してくれたトクさんの話が、すてきにおもしろかったからです。

「ああ、おもしろかった。」

と、とこやさんのいすからおりながら、男の子はいいました。
「ほんとうのことをいうとね、ぼく、とこやさんにいくの大
きらいだったの。だって、頭をあたまかってもらっているあいだ、
なにもできないでしょう。たいくつで、たいくつで、どうし
ていいかわからないんだもの。」

でも、きょうは、とつてもたのしかった。だって、おじさんの話はなしが……。」

そこまでいったとき、トクさんはかた目めをつぶつて、やさしく男おとこの子をにらみました。

「おじさんは、やめてもらいたいな。おにいさんといってほしいよ。でなかったら、トクさんとね。なにしろ、ぼくはまだ、およめさんもらっていないんだからね。」

「じゃ、いいなおすけど……。」

と、男おとこの子はつづけていいました。

「おにいさんの話はなしって、とつてもおもしろいんだもの。長い

と思^{おも}っていたさんばつが、あつというまにおわつちまつたみたい。こんど、また、きかせてね。」

そして、もう、ずっとまえからの友^{とも}だちみたいに、トクさんとあくしゅして、お店^{みせ}からでていきました。

さて、それからというもの、男^{おとこ}の子^こがいいふらしたのでしょうか、トクさんのとこやさんには、ぽつぽつ、子^こどものお客^{きやく}さんがやってきました。

みんな、トクさんのおもしろいお話^{はなし}をききたがつて、やってきたのです。

どうかすると、とこやさんのせまいまちあい室しむは、子ども
たちで、まんいんになることができました。すると、トクさ
んは、

「まつてる子こどもは、うらの畑はたけにいつてごらん。じゅんばん
がきたら、よんであげるから。」
といいました。



子どもたちが、うらの畑はたけにいつてみると、畑はたけには、

この畑はたけではたらいたものは、いまに

おいしい やさいが 食たべられます。

と、立たてふだが立たっていました。

子どもたちが、その立たてふだを見みて、

「この畑はたけではたらくつて、どうしたらいいの。」

と、畑はたけにいるトクさんのおかあさんにたずねると、おかあさん
んは、

「ほら、これがほうれんそう、あれがえだまめ、そのむこう
がとうもろこし、こっちはトマトときゅうりのなえ。」

とおしえてくれて、

「そうだね、きょうは、じゃがいもの土^{つち}よせをてつだつても
らおうかね。」

といったり、

「きょうは、草^{くさ}とりを、おねがいしようか。」

といったりします。

そういわれると、子どもたちはおもしろがつて、きょうそ
うで、畑^{はたけ}のしごとをてつだいました。

このことは、トクさんにとつても、子どもたちにとつても、
おたがいにいいことでした。